利根中央病院だより

きらめき

第76号
2025年　夏号

発行責任者　利根中央病院　病院長
編集責任者　利根中央病院　事務長
〒378-0012　群馬県沼田市沼須町910−1
TEL：0278-22-4321（代表）
FAX：0278-22-4393
URL：https://www.tonehoken.or.jp/

バス会社７社と水害発生時の入院患者搬送災害協定締結

災害拠点病院である利根中央病院で５月29日（木）に、地域のバス会社７社と「水害時における病院避難のための災害協定」を締結しました。

片品川の氾濫危険情報が発令され、上流の薗原ダムの緊急放流が決定された際に、利根中央病院では、全入院患者を地域の医療・福祉施設に避難させる計画となっており、独力での歩行が可能な入院患者の搬送をバス会社に要請することとなりました。

地域のバス会社は尾瀬紀行（片品村）、関越交通（渋川市）、高山運輸倉庫（高山村）、利根西部運送（沼田市）、三浦観光（みなかみ町）、やすらぎ交通（沼田市）、エースフロント（昭和村）の７社です。

締結式では、関原院長、バス会社を代表して三浦観光の三浦啓二社長よりそれぞれ「地域のバス会社の協力が得られるのは心強い」、「一人も残さず、安全な場所に避難できるように協力したい」との言葉が述べられ、地域の安全・安心をより強化していくことが確認されました。

なお、自力での歩行が難しい患者の搬送には、当院の救急車や他の医療機関・福祉施設のストレッチャー車を使用するなど地域の医療機関・福祉施設の協力をいただくこととなっています。

災害協定締結式の様子

外科の紹介

診療部長／外科科長・救急科科長　郡（こおり）　隆之（たかゆき）

当院外科は、地域の基幹病院として乳腺・呼吸器・消化器外科領域から外傷・急性疾患、緩和ケアまで幅広い外科医療を担い、群馬県北部医療圏の要としての役割を果たしております。2024年度はアフターコロナで通常診療が回復する一方、県北部の救急医療体制の脆弱化を背景に、当院への救急搬送や紹介がさらに集中する傾向が続いています。昼夜を問わず救急外科対応を行っておりますが、全体として安定した受け入れ体制を維持しています。

現在、外科医師は病院長関原正夫を含めて大学医局からの派遣継続で７名体制を維持し、郡隆之（診療部長）、小林克巳（部長）、稲川万里江（医長）、浦部貴史（医長）、岩崎竜也（医長）、根岸諒の各医師が専門性を活かした診療に従事しています。がん治療領域では、稲川医師の着任により大腸がんを中心とした鏡視下手術が強化され、がん研有明病院で研修を終えた浦部医師の復帰により呼吸器外科も二人体制となりました。

手術の様子

また、小林医師を中心にNST（栄養サポートチーム）活動にも積極的に取り組み、GLIM基準の導入や病棟回診の充実を通じ、入院患者の栄養管理と早期回復を支援しています。今後も医療の質の向上と、救急体制の強化に取り組んでまいります。

前列左から 郡、稲川、小林　後列左から 浦部、岩﨑、根岸の各医師
後列右端は研修医 原口医師

検査室の紹介

検査室技師長　関根（せきね）　美智子（みちこ）

検査室は臨床検査技師20名、看護師４名が勤務しています。１階は、採血室と生理検査室、２階は検体検査室で、１階で採血した検体などをダムウエーターで２階に搬送して、検査を行っています。

細菌検査室では新型コロナ検査のために購入したPCRの検査機器を活用して、マイコプラズマ肺炎や百日咳の検査を行っています。検体到着から40分くらいで結果報告が可能で、マイコプラズマ肺炎に至っては、薬剤耐性の有無もわかります。

病理検査室では、長年勤務されていた大野医師の退職に伴い、４月より小川晃医師が科長として着任されました。免疫染色は抗体を用いて細胞中の特定のタンパク質を可視化することで腫瘍の分類や悪性度の評価など、より正確な病理診断を行うのに必要な検査ですが、自動免疫染色機の導入により、それまでの手作業に比べ短期間で報告が可能となりました。

生理検査室では、超音波や心電図、肺機能などの日常検査の実施、さらに循環器センターの一員としてチーム医療の現場でも活躍しています。予約検査も多いですが、できる限り当日の依頼にも対応しています。

検体検査室では、血液や尿、新型コロナを含むウイルス検査など、毎日数多くの検査を行っています。結果を緊急連絡する場合、「医師に直接報告することを原則とする」「記録を残す」など、医療安全にも努めています。

どの検査においても、その検査が正しく行われているのか、正しい値がでているのかがとても重要です。毎日の機器の定期点検はもちろん、毎年行われる外部の精度管理調査にも参加して、臨床検査の精度を担保しています。

自動免疫染色機

心肺運動負荷試験

PCR 検査

コミュニケーション研修

新年度を迎え、今年度も利用委員・組合員さんにご協力いただくコミュニケーション研修を実施しました。初期研修医との合同で、新人看護師14名、初期研修医５名、組合員９名が参加しました。

まず、実際に患者様からお話を聞く場面を想定し、組合員さんが患者役、研修生が情報収集する練習をしました。次に、組合員さんと「患者様が話しやすい医療従事者の姿勢・態度」というテーマでグループワークを行いました。最後は恒例となった「患者様に関わるときに大切にしたいこと」について研修生一人ひとりが漢字一文字で決意表明をしました。

各々の抱負を一文字で

研修を終えて

研修医　茂木（もてぎ）　愛里（あいり）

導入期のコミュニケーション研修では、組合員の方にご協力いただき、病歴聴取を行いました。

初めは緊張しましたが、丁寧に耳を傾けることで自然と会話が生まれ、その方の人生や想いに触れることができました。「話を聴いてもらえて安心した」との言葉が心に残り、医療とは単に病気を診るだけでなく、目の前の人に誠実に向き合うことだと再認識しました。

この経験を通して、患者さんの言葉や表情から多くを学び、寄り添う姿勢を大切にしていきたいと強く感じました。貴重な学びに心より感謝申し上げます。

6A病棟　助産師　坂爪（さかづめ）　美友（みゆ）

看護職と研修医を対象としたアナムネ聴取の研修が行われました。この研修では組合員さんに協力を頂き、入院時の情報収集でのコミュニケーションを通して感じたことを共有していただきました。

私は初めてお会いする組合員さんと上手くコミュニケーションが取れるか不安でした。しかし組合員さんから言葉遣いや表情など丁寧な関わりについてお褒めの言葉を頂き自信を持つことが出来ました。研修を機に相手の立場になって考え、行動することが患者さんから安心と信頼をいただくために大切であると改めて実感しました。これから患者さんを１番近くで見守り支援する看護職として、この研修で感じた思いを忘れず地域の皆様に貢献できるよう励んでいきたいと思います。